



アーサー・ウェイリー,  
『中国人の眼を通して見たアヘン戦争』(一九五八年)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002373">https://doi.org/10.24729/00002373</a>

アーサー・ウェイリー

『中国人の眼を通して見たアヘン戦争』（一九五八年）

—Arthur Waley, *The Opium War Through Chinese Eyes*, 1958.—

西村孝夫

一 著者と本書のねらい

余り著者の名を知らない読者のために著者アーサー・ウェイリーを紹介しておく、彼は一八八九年生れで現在七十一才、元ブリテイッシュ・ミュージアムの版画・絵画部保護官補 (Assistant-Keeper in the Department of Prints and Drawings, Brit. Mus.) であった。東洋に関する著訳書多く次の通りである (発行年不詳)。

*The Nine Songs.*

*The Real Tripitaka.*

*The Poetry and Career of Li Po.*  
*The Life and Times of Po Chü-I.*  
*Chinese Poems.*  
*Monkey.*

*Three Ways of Thought in Ancient China.*  
*The Book of Songs*

*The Way and its Power.*

*The Tale of Genji.*

*The Nô Plays of Japan.*

*The Temple and other Poems.*

*More Translations from the Chinese.*

アーサー・ウェイリー『中国人の眼を通して見たアヘン戦争』（一九五八年）

一四九

*The Pillow-Book of Sei Shonagon.*

*Yuan Mei.*

著者の語によれば本書の意図はアヘン戦争の完全な歴史を描くことにあるのではなく、著者も度々指摘しているように（序言七頁、一二頁）、アヘン戦争が中国人側に与えた感情を明白にすることである。そのために著者はこの当時カントンの欽差大臣であったかの林則徐の一八三九年二月一日から一八四一年七月一六日までの日記（但し一八四〇年二月三日から同年九月一〇日までを欠く）や、アヘン戦争当時の書簡、詩、報告などを集録した『鴉片戦争叢刊（？）』（一九五五年上海刊）その他を駆使している（二四八頁）。全体を五部に分け、左の如き構成とする。

- I Commissioner Lin at Canton
- II Songs of Oh dear, Oh dear!
- III Shanghai
- IV Chinkiang
- V Gutzlaff and his Traitors Mamo

これらについては後述するとして、本書の叙述が関連する曆を著者の作成したものを利用して示せば次の通りである（二四六―七頁）。

一八三九年

三月一日 林則徐カントン到着。  
三月一八日 林、アヘン引渡し要求。  
三月二七日 エリオット引渡しに同意。  
四月二三日 林、江南、江西両省総督となるが、カントんに残留。

七月 六日 新アヘン規範カントんに到着。

八月二〇日 英人マカオより撤退始める。

八月二七日 マカオの撤去完了。

八月三〇日 英軍艦ヴォレージ到着。

九月 四日 九竜の戦い。

九月一八日 英軍艦ヒヤシンス到着。

十一月 三日 穿鼻の戦い。

十一月三〇日 英商船ケムブリッジ号、米人デラノに販売。

一八四〇年

一月 ケムブリッジ号林に販売。

一月二六日 林、広東、広西両省総督となる。

六月二一日 英派遣艦隊主力到着。

七月 五日 定海陥落。

八月一九日 関門の戦い。

八月二〇日 清帝、パーマストン卿の書簡閲見。

一〇月一三日 林、総督を罷免されたことを知る。

一〇月二〇日 北京に裁判のため行くべき命令を林知る。

十一月二〇日 エリオット、マカオに帰る。

十一月二九日 エリオットの隠退。

#### 一八四一年

一月 七日 シャコック、タイコック両要塞陥落。

一月二〇日 穿鼻会議調印。

二月二五日 定海中国側に返還さる。

二月二六日 中虎門諸要塞陥落。

三月一八日 カントン諸商館再占領。

五月 三日 林、カントンを離る。

五月二一日 英人、商館を再度離る。

五月二七日 中国側カントン攻撃を避けるため六〇〇万ドルの支払に同意。

五月二九日 三原里附近で掠奪中の英兵農民に包囲さる。

八月二一日 英第二次派遣隊北上。

一〇月 一日 定海第二次陥落。

一〇月一〇日 鎮海陥落。

一〇月一三日 寧波陥落。

#### 一八四二年

三月一〇日 中国側寧波の奪還企つ。

五月 七日 寧波、英人によって疎開させられる。

五月一八日 乍浦陥落。

六月一九日 上海陥落。

七月二一日 鎮江陥落。

八月二九日 南京条約締結。

以上の諸事件に関連して、著者は第一部において林の日記を中心としてカントンの事情を、第二部においてはペイ・チン・チャオの記録を中心にして寧波の事情を、第三部においてツァオ・シャングという一上海人の日記を中心にして上海への外国人侵入（一八四二年六月一六―二八日）の事情を、第四部において詩人チュ・シ・ユンの日記を中心にして鎮江の事情を、第五部においてはプロシヤ使節グツラフの当時における活動を明らかにしようとする。

著者はむしろこうした記録類を翻訳することだけでも意味があると考えているようにも受取れるけれども、しかし随所に挿入されている著者自身の見解から見て、やはり積極的にアヘン戦争の中国側史料からむしろ「事実」を知ろうとする意図がはのかに見え隠れするし、決して中国人の感情のみを述べようと

せず、むしろ彼自身の意見、史実解釈をも述べているのに注目すべきである。本書の長所も、また短所も実はこのような著者の態度から由来しているように思われる。

## 二 内 容 分 析

著者は二四四頁の本書の三分の二に当る部分（頁数にして一五七）をカントンにおける林則徐の言行の叙述に当てている。従来アヘン戦争を記したヨーロッパの諸著作中において林が最も自動機械のように描かれているが、それは何れの著書もヨーロッパ側の史料に基いているためである。それゆえ林の日記を用いてその感情を描き出そうというのがウェイリーの最初の意図である。林が欽差大臣としてカントんに来住し、ここで行く徹底したアヘン禁圧政策から叙述は始まる。だがここで著者はこのアヘンと銀流出との因果関連については何もかも立証しないとし、銀流出が恰も他の原因で起ったかの如き印象を著者に与えようとしている（二五頁）。

しかしながら、この点は著者の歴史的知識が狭いため充分な論議が展開できないから仕方がないのだが、実はイギリス人によるアヘンの販売と銀の流出とは大いに関係がある。手短かにいえば一八一三年にインドの、そして一八三四年に中国の貿易

がイギリス東インド会社の貿易独占より開放されて以来、インドを足場にした会社以外の自由貿易商人が盛に中国に進出し、ここにイギリス工業製品を売捌こうとした、しかし中国は広東一港のみに貿易を制限し、茶や大黄の買付を許しただけで、一向にイギリス綿製品を受付けようとしなかった。それもそのはず、中国には南京木綿という丈夫な粗製品が製せられ充分にその用を足していたからである。仕方がないのでインドで東インド会社が栽培していたアヘンを中国に売込み、銀を獲得し、この銀で茶やその他の中国商品を買うという方式をとらざるをえない。銀の流出、減少は銀と銅との比価を大いに狂わせ、清朝財政上由々しい問題となるに至った。アヘンの禁圧もさることながら、銀流出の防止策を講ずることは中国朝廷にとって大切な時代の要務であった。林則徐がわざわざ特別使命を帯びて来広したのもその目的からである。だから本書の著者ウェイリーが中国土産のアヘンが取締りの対象にならなかった点を指摘している（二六頁）けれども、これはアヘン禁圧政策の本来の目標の在りかたを把握していないことから起る誤解である（以上については拙著『イギリス東インド会社史論』第五章二を見よ）。著者自らも引用しているパーマストン卿の語中に、アヘンの中国への輸入によって貿易のバランスが保たれ、その輸入停止は

インド財政に対して危険であるというのは、実はこのような事情をイギリス側から見て正直に述べたものに他ならない（三二頁）。

かくて林則徐は国内的なアヘン禁圧政策から対英関係という国際的な関連から公然イギリス私貿易商人とりわけイギリスの中国貿易管理官たるエリオットと対抗するに至る。エリオットに対するアヘン引渡要求と英水兵による中国人殺害事件の解決要求とはその前哨戦となるものであった。著者ウェイリーはこの場所で治外法権(extraterritoriality)は当時の中国における拷問の仕方や不衛生な監獄の状態を考えれば正当であったし、また殺害事件についても胸の上の打撲傷が死因とはならないことや当時アメリカ水夫もその附近にいたというエリオットの語を引用して当時のエリオットの行動を正当なものと弁じている。

だが林則徐がマカオのポルトガル人を見て「実際彼等は悪魔のような顔をしている」と書いている日記の項（六八頁）の引用は、われわれにとつては興味があるし、また一考に値する問題を含んでいる。さらに林やその配下の軍人が虚偽の戦勝の報告を北京に送っているのは、高位高官に昇任せんがための中国官僚の悪弊であるとウェイリーが突いているのは痛烈である（七

一―二頁）。われわれはこれに似たような事件をわれわれの身近で経験した。

それはともかく、林はアヘン引渡しを実施後、今後は外国商人でカントンに通商するものに対し、保証書にサインせしめることにした。しかしエリオットが頑強にこれを拒否している間に、かの穿鼻の戦いが英国軍艦によって惹起された。これは二カ月前の九竜の戦いと共にアヘン戦争の前哨戦であった。

一八四〇年一月二日エリオットに代って管理官となったジョージ・トーマス・スタウントンがカントンに来た。ウェイリーはここでスタウントンが一方でアヘン貿易に強烈な反対を示しながら、他方で対中国戦を公正・適宜な処置であるとして政府を支持しているのは奇妙な意見であると評している（九四頁）。しかし、実は奇妙でも何でもない。イギリスの対中国戦は新興イギリス産業資本の製品を中国市場に打込むための強硬策であり、その面から見れば、アヘン貿易を固執することによってかえって中国を自らの貝殻の中に閉じこもらせるようなやり方は妥当な策ではないからである。

一八四〇年六月英派遣船隊のマカオ沖到着によって戦機は熟した。七、八月定海陥落、関門の戦いの後を承けて、パーマストンは清帝にイギリスの要求を突つけた（これは付録として二

四五頁に要旨を収録してある。林則徐の罷免はそれから二カ月後である。これ以後二カ年の間にイギリス軍隊はカントン以外  
の定海、鎮海、寧波、上海、鎮江などで弱体な清の軍隊を破  
り、一八四二年八月二九日遂に南京条約によって五港の開港、  
賠償金その他の諸権益を獲得したのである。ここまでの経緯  
と、これに関するウェイリーの第二部以後の叙述は紙数の関係  
もあるし、また本書を直接手にとられる読者の興味を削がない  
ために省略したい。ただし、この第一部の最後になって、  
ウェイリーが次の如く述べている語を紹介して、次の結びの中  
心問題としたい。曰く、「ある読者達は私が、エリオットを犠  
牲にして、余りにも林にひいきして来たように思われるかも知  
れない。しかし、イギリス人的な視点よりは、むしろ中国人の  
視角を示すのが私の著書の目的全体なのだ」と。

### 三 結 びー一つの批判

われわれはこのウェイリーの書物が『中国人の眼を通して見  
たアヘン戦争』という表現になっているのに強烈な興味をひか  
れて手にしたのである。実は少からず失望の感をもったのだ  
が、その半面少からず考えさせられる問題をここで学び知った。

ウェイリーは先述の語の中で、中国人的な視角を示すという

自らの意図を示し、決して林則徐にひいきしているのではないと  
いつている。林則徐にひいきしているのではないことはこの書物  
を注意深く読む者ならば直ちに判明する。しかし他面「中国人  
的な視角を示す」という彼の本来の意図は、彼の中国語に対す  
る深い造詣や中国人の書いた資料の利用にも拘らず、成功して  
いるとはいいい難い。随所に挿入された彼自身のイギリス人とし  
ての見解がそうした意図を妨げて了っているからである。たと  
え中国人の日記、記録類をふんだんに利用していても、やはり  
これは「イギリス人の眼を通して見た」アヘン戦争観に他なら  
ないからである。その著例については先きに述べた所からも知  
られよう。著者の意図にも拘わらず、林則徐は依然として北京  
の指令によって動かされる「自動機械」として描かれている。  
われわれが失望感というのはこうした点にかかっている。

しかしながら、逆にわれわれがウェイリーの描いたエリオッ  
トやその他のヨーロッパ人を、林則徐の日記の言の如く、単に  
「悪魔のような顔をした」という位の皮相な観方をしているな  
らば、われわれもまたウェイリーの歴史観以上に出ることは出  
来ない。アヘン戦争が単に好戦的な一部のヨーロッパ人の天帝  
の国たる中国への侵略戦争であった位の認識で止まっているの  
ならば、およそアジアの近代化の歴史的特質を明白に認識する

ことは出来ない。何故にこのような戦争が惹起されたのか。最近の中共においては中国の近代史がアヘン戦争にまで遡って研究されつつあると仄聞する。これは尤もなことだとわれわれは思う。イギリス人であるウェイリーがアヘン戦争に関する原史料を駆使してこのような書物を書くに至った世界的な環境を考えると、われわれ自身がアジアの近代化の黎明期におけるアヘン戦争を、明治維新やインドのセポイ叛乱と共に一連の歴史過

程として基礎過程にまでメスを入れて学ぶ研究動向がわれわれの側にもあつてほしいと思う。その意味でウェイリーの大胆な試みを多としたい。

最近アメリカでもイギリスでも、中国や日本の開国の事情に関する歴史的研究が数冊出ており、中には秀れた研究がみられることを付記して、この蕪雑な書評を終りたい。

(二九六〇・四・二二)